

「学問好きの上の兄上は国学者に、

中の兄上は百姓がよい、わしは

木地屋の躰になる」

と三太郎がいえば、

「三太郎、木地屋の躰になると若死

するというぞ」

権太夫がからかった。三太郎は

「若死してもよい。木地屋の娘は

美しいから」

眸を輝やかし頬を赤らめて言う

のだった。

だが、松太郎が十五才になるのを

待ちかねて代官は松太郎を下人に

落し、栗枝渡神社の市で牛馬同様

「せり」にかけた。

母が真心こめて作った太布の

着物に鹿皮の「おんごり袴」をつ

けた松太郎は、虚無的な瞳で自分

を「せり」あげる男たちを眺めて

いた。

栗枝渡神社の境内の一隅には、

「安徳天皇御火葬跡」

と伝えられる所があり、更にこ

の神社には安徳天皇の遺品を祀つ

てあるので、祖谷の者は、平家の

末裔である松太郎に値をつけず、

隣村の半田に住む土豪が、

「二十両」

で松太郎を買った。

二年後に権太郎も同じ邸に買い

とられた。

三太郎は祖谷の木地屋に頼んで

買って貰った。子どもの頃からあこ

がれていた木地屋の邸に入った

三太郎の喜びも束の間、木地屋の

娘たちは下人の三太郎を人間扱

いにしなかつた。その上苛酷な仕事

をあてがわれ耐えかねて邸を逃げ

出しては次々と売られ、三太郎は

笑を忘れた人間になっていた。

「兄上が買い取ってくださいならな

かったら、わたしはこの世に生きてい

なかつたかも知れませぬ、今ここに

こうしておられるのは全く夢のよ

うでございませぬ。」

「ご先祖様がわれら兄弟をお守り

くださつたに違いない。一度墓前祭

を致さねばと思つておる」

「われらの今日の姿を母上にお見

せできぬのが残念でなりませぬ」

三右衛門はぐつと下唇をかみ

しめた。三人の男の子を次々と

下人に落された母は生きる力を

失つたかのように、三太郎が下人

に落されるとまもなくこの世を去

つた。

その頃の金毘羅大権現は先の

讃岐の藩主生駒一正の寄進により

二百四十七石を神領としていた

が、寛永十七年（一六四〇）

九月、時の藩主生駒高俊が家臣の

内紛により封地没収一万石の

堪忍料で出羽矢島に流されたので、

次の藩主松平頼重は八十三石を

加えて三百三十石を神領として

寄進、幕府に朱印状を願ひ出て

下付されたのは慶安元年

（一六四八）二月十四日であ

る。

金毘羅大権現を総括する金光

院別当有典は直ちに江戸に出席、三代將軍家光に朱印状下付の御札を言上した。

以来別当の代替りには「継目御札」に、更に七年ごとに代僧が参府することになった。

この朱印状によって別当の任務は現在の金刀比羅宮の宮司と琴平町長を兼務する大役となった。

別当は金光院という館に住み、神域内に真光院、万福院、普門院、神護院、尊勝院という五つの寺を持ち、金毘羅町の中心部に表役所を置き統治したのである。一門はお山侍と呼ばれ、寺僧、社人、表役人、儒者、奥医師など総数百五十余名であった。

別当の格式は数万石の大名と

対等で、江戸城では大広間御溜の間に控え、白書院二之間において御

礼、御暇を言上、拝領物は柳の間で頂き、帰途は京都に立ちより天顔を拝することも許された。

もともと金毘羅大権現は歴代皇室の崇敬厚く、後嵯峨天皇は康元年(一二五六)勅令を以

て祭儀を修め、後水尾天皇は寛永十六年(一六三九)大判金を御進納されるなど、事実上の勅願所といふべき社であったから、大名参詣も多く、民衆もまた、「一生に一度はお伊勢詣り」と金毘羅詣りを念願としており、参詣人は絶えず、寄進も多い豊かな

社であった。

その噂を聞いて諸国から流れ者が集り、物乞いをしたり行き倒れたりする。

松太夫は昔、蔵太夫に助けられた恩返しと思ひこした難民に手をさしのべるので、暮しはいつも火

の車であった。見かねて権太夫が祖谷の薬草を売るようすすめた。松太夫が表役人に相談すると、

「金毘羅ではもうこれ以上店はふやせませぬ。米屋三十一軒、呉服屋十軒、醤油屋三軒、酒屋八軒、絞油五軒、縫箔一軒、桶屋十二軒、旅籠六十軒、これらの店は総て歴代別当殿の知人で今まで冥加銀を納めているので、これ以上店を

出すことは禁じられております」

この話を聞いて権太夫は、「そんな馬鹿な話があるものか、

金毘羅に薬草を売る店が一軒もないのだから店は必要はず、別当殿に直接かけあいなされ」

と松太夫にすすめた。別当有典は表役人から話を聞いていたらしく、

「神職にある者が商をするのは好ましくない。それ程生活に困らなら内記を呼び戻して学問所を開かせよ」といった。内記が京都からもどつて学問所を開いたのは寛文五年(一六六五)の春である。幼い頃、神童とてはやされた

内記が、京都で大西丹後に師事して

十五年間、神道、国学、連歌、俳諧、

画筆、蹴鞠などを学んで帰ったので、

学問所を開くと、丸亀、高松、両藩の

子弟が通い始め、門前市をなす有様

であった。

この年、内記は祖谷から母の姪

蒔子を妻にむかえた。蒔子は十六

歳で、二十一歳の内記と並ぶと内裏

雛のように見えた。

当時、讃岐では白鳥神社の神職

猪熊千倉と高松の石清尾八幡宮の

神職友安盛員を「讃岐の碩学」と呼

んでいた。猪熊千倉は歌人でもあり、

国学者でもあった。高松藩主松平

頼重が二百石の朱印状を有する

白鳥神社にむかえたのが、寛文五年

(一六六五)七月二十一日で

ある。

友安盛員は承応元年

(一六五二)仲春「讃岐大

日記」を著した学者で、この兩名

に次ぐ者は玉尾内記と噂されてい

た。内記が京都からもどつてまもな

く、高松藩主が三十番神社に参籠

の旨連絡があつた。

金毘羅の縁起によると、

金毘羅大権現が入定した廓窟の

中に仏舍利と金写の法華経が籠め

置かれていると伝えられ、この

法華経の守り神として三十番神が

祀られ、その神祠が本殿の近くに建

てられていた。これが三十番神社

である。

この社の創立は詳らかではな

いが、慶長前より祀られており、

正保二年(一六四五)九月

二十六日、松平頼重上棟の社殿が

ある。参籠を終えた頼重は、金光院別当

に、「当社にあると承つておる、

崇徳上皇ゆかりの書物を拝見した

いと申し入れた。

金毘羅大権現は大物主神を本殿

にまつり、相殿には崇徳上皇の

神霊が祀られている。

頼重は参籠中、象頭山に揺曳す

る雲気の中に、上皇の怨霊を感じ

たようであった。

別当が、「上皇様崩御の翌年、御神霊を

勧請致しました由にて、その時か

ら伝わる書物でござる」

そういつて、書は世尊寺家経、画

は高階隆兼の「なよたけ物語」紙本

一卷をさし出すと、

「後嵯峨帝の恋物語か」

頼重はそうつぶやくと、書物を手

にとろうとしなかつた。謫居の生活

は淋しさの極みであつたという

崇徳上皇が「なよたけ物語」で心

を慰められたとは思えなかつたの

である。眼を転じた頼重は、緑色布地に

白の織り出し花文の「伊勢物語

肖柏筆」を見つけて、

「これも上皇ゆかりの書物でござ

るか」

「さようでございまする」

別当べつどうがうやうやしく答こたえると、

頼重よりしげ ひうんは悲運じようこうの上皇じようこうが、

つれづれに読よまれた跡あとをなつかし

むかのように、楮こうぞ 紙しの

「伊勢物語いせものがたり」をめぐりながら尋たずねた。

「これを書かいた肖柏しょうはくとは、如何いかな

る人物じんぶつでござるか」

別当べつどうは思おもいがけない質問しつもんにうろ

たえ、一座いちざの者ものを見渡みわたしたが、誰だれも

答こたえようとしなかった。

(以上10月15日放送分)